

Oshima
Letter

大島レター

5



January
2019



表紙のお話

カフェ・シヨルでは、大島の土で出来た「大島焼」で、コーヒーやお菓子を楽しくいただきました。

「大島を味わう」をテーマにしたシヨルにとって、かかせない器たち。瀬戸内国際芸術祭2010の時に、カフェのオープンのために制作しました。大島焼との最初の出会いは、陶芸部の故・山本隆久さんの作品。カフェの器は、山本さんのご指導のもと、大島の土を活かす釉薬の色、入所者の皆さんが使いやすい形や重さ等、検討を重ねながら作りました。1つ1つ違う形をしているので、皆さんの手になじむお気に入りの器を見つけていただけましたら嬉しいです。(泉麻衣子・井木宏美)





目次

へ 最近の活動紹介 へ

「大島 島とつながる交歓会」

3

へ インタビュー へ

社会交流会館 学芸員 池永禎子さんにお話を聞きました

5

へ 連載コーナー へ

瀬戸内放送局 今月の「大島アワー」

9

へ 大島の連絡帖 へ

大島ジオラマ制作プロジェクト

10

編集後記

大島 島とつながる 交歓会

へ 最近の活動紹介 へ

「大島 島とつながる交歓会」



大島の周りには女木島、男木島、豊島、小豆島などの有人島があります。同じ瀬戸内海に浮かぶ島ですが、実は島間の交流はさほど多くありません。「大島 島とつながる交歓会」は、大島に瀬戸内の島々のみなさんが集まり、食・文化・歴史などの情報を交換し、交流を深めることを目的に開催しました。同時に島間交流も実施し、より多くの島々の方々が集まる機会としました。両方とも瀬戸内国際芸術祭実行委員会主催の企画です。

イベントは2本立て。一つは、小さな市場。大島の方も島外から訪れたお客さんも買い物や出店者さんとの会話を楽しめる場にしようと、直島、豊島、小豆島、男木島、高見島、宇野港の雑貨や焼き菓子などのお店に参加してもらいました。

もう一つは伝統芸能の披露。男木島からは100年程前から続くといわれている獅子舞がやってきました。可愛らしく踊っているのは男木島に移住した子どもたちです。小豆島の石節振興会のみなさんは、かつて石を切り出すとき歌われていた石節を披露してくれました。今でもお祝いの席の余興の一番の出し物として、石節が歌われているそうです。最後は、スペシャルゲストの津軽三味線全国チャンピオンにもなった阿部

金三郎さん、銀三郎さんの登場。お二人の三味線の演奏と軽快なトークで会場も大盛況でした。

会の間では、各島や港のみなさんにそれぞれの島や港のことを紹介していただきました。大島は自治会長の森さんが、これまでの大島の歴史的背景から、他の島のみなさんとの交流はほとんどなく、このような機会のみなさんが来てくれ

男木島と小豆島から参加した方にお話を伺いました

井口 秀俊さん（土庄町役場商工観光課）

私は、今回が2回目の大島訪問でした。大島がハンセン病の療養所だということは知っていましたが、こういう機会でないとなると来ることなかなかないですね。今回、石節を披露させてもらいましたが、大島のみなさんは明るい表情で出迎えてくれ、快く受けて入れてくれたことが嬉しかったです。石節のメンバーの多くは初めての大島でしたが、みんな喜んでくれていました。石節は歓迎の歌で、この歌が大島のみなさんの頭の片隅に残ってくれていたら嬉しいです。これも何かの縁。将来的には大島と行き来できるような交流ができると良いですし、石節のメンバーに若い方を入れて、また大島へ行きたいですね。いろんな世代に繋がればと思います。

たことは嬉しいこと。また大島を地域にどう開いていくかについてもこれから考えていく必要があると話していました。

大島にたくさんの方が訪れ、人や地域との繋がりが増えること、そしてこれから地域に開いていくために、芸術祭を通して少しでもお手伝いできたらと思っています。

福井 大和さん（男木地区連合自治会長）

私は、男木島に高校1年生（1993年）まで住んでいました。大島には病院があることは知っていましたが、ハンセン病の療養所だということは知りませんでした。その後、らい予防法が廃止された後にそれが療養所だということを初めて知りました。数年前に私の娘が「子どもサマーキャンプ」（高松市主催）に参加し、大島の話は聞いていましたが、実際に自分が大島へ行って感じるのとは大きな差がありました。近くにある同じ離島ですが、知らないことばかりでした。以前からずっと男木島・女木島・大島で何かできないかと考えていました。各島で抱えている問題がありますが、それぞれが共有して何かできることはないだろうか、前にも増して強く思うようになりました。こういう交流を今後も継続できたらと思いますし、大島のみなさんにも男木島に来てもらいたいですね。

社会交流会館 学芸員

池永禎子さんにお話を聞きました

2019年にグランドオープンする社会交流会館。一年前から学芸員として勤務する池永禎子さんにハンセン病や大島との出会い、社会交流会館のことなどを聞いてきました。

社会交流会館



Qハンセン病や大島との出会いを教えてください

2001年、大学を卒業して少し経った頃ですが、ハンセン病の国家賠償訴訟の熊本地裁判決を報じるニュースを見たのがきっかけでした。卒業後はしばらく民間企業で働いていましたが、幼い頃からの目標であった学芸員として歩むことを決意し、アルバイトからの再スタート、歴史系博物館や研究機関で経験を積んできました。転機となったのは、都内の資料館で戦後シベリア強制抑留の展示会を企画・実施した時です。当事者の語りや残された資料から故郷から遠く離れた酷寒の地にある収容所の中で抑留者が、劣悪な生活環境の中でも楽しみを見つけ、仲間同士支え合い、劇団を作ってお芝居をしていたことなども知りました。その頃からハンセン病の歴史について研究を始めていたので、相通ずるものがあると感じました。同時に、人は極限まで追い詰められた状況の中でも、支え合い、創意工夫して生き抜こうとする力があるということを知り、胸を打たれました。どちらも教科書ではあまり触れられていない歴史です。都合な事実として消滅しかねない危機にあると言っても過言ではなく、いつかはこうした歴史を伝える仕事に学芸員人生を捧げられたらいいなと思っていました。

ハンセン病は2001年の国家賠償訴訟で国が過ちを認め謝罪し、新たに補償を行う法律も作られました。しかし、それで終わりではありません。現在進行中の問題として、私たちも解決のためにできることをしていかねばいけないと思います。

これまでの勤務先は関東でしたが、療養所に関しては長島愛生園の情報を耳にする機会が多かった印象があります。いち早く、世界遺産登録を掲げていた影響もあるのでしょう。長島愛生園について調査していくにつれ、関心は瀬戸内三園へと広がりました。それぞれの療養所が歩んできた歴史を知り、大島が全国の他の療養所と比べてかなり特殊な環境・立地にあることがわかり、もっと深く知りたい、関わりたいと思うようになりました。なので大島青松園で学芸員を公募していることを知った時は、迷わず応募しました。大島で働くことを決意したのは、残りの学芸員としての人生はハンセン病関係の研究と、大島の記憶を後世に伝えることに捧げたいと思ったのが一番の動機なので、長年に渡り闘ってきた運動の成果であるこの社会交流会館を、入所者のみなさんや職員さんたちとも協働して作り上げたいと思っています。

Q今はどんなお仕事をされていますか？

社会交流会館の全面オープンに向けて、準備作業をしています。大島青松園には、どんなものがあつて、その資料がどういう来歴を持ち、現在の保存状態はどうなっているのかを調査した上で、それらを組み合わせるとどういう展示ができるのかを考えています。また、各展示室の環境を把握し、改善するために高精度の温室時計や害虫トラップを設置し、現在の各展示室および館全体の環境を把握し、改善することに努めています。昨年の夏には資料を害虫から守り適切に保存していくための第一歩として燻蒸という作業も行いました。

大島では、療養所の歴史や生活の証となる資料を残すという行為は、個人個人ではなされていたかもしれませんが、いわゆる「資料館」「展示室」といったものがこれまでなかったことに驚きました。なぜなら他園では、入所者自身が展示を作っているケースが多かったからです。そこをこれまで担っていてくれたのが瀬戸内国際芸術祭やこえび隊の皆さんだったように思いますが、今後は社会交流会館に常設の展示室ができるので、うまく連携していければと考えています。

Q これまでの仕事と違うことは？

他園と違い、完全な離島で敷地に限りがあるからかもしれないませんが、これまで古くなった建物、使われなくなった建物は保存せずに、壊して新しく建て替え、その過程で建物に残っていた生活用具等も破棄される、ということが繰り返されてきました。ゆえに当時の様子を把握するのに苦戦していますが、それも大島ならではの歴史・事情だと理解しています。

また、今ある資料は博物館や資料館の設立準備段階に必ず作成する資料台帳がありません。その整備をするところから始める必要があります。なぜ台帳が必要かと言うと、財産目録のように、大島の資料についても値段をつけることは難しいですが、いつ誰が使っていて、どういう経緯でここにあるのかという記録がないと、説明できません。いくら資料が少なくとはいえ、みなさんの記憶があるうちに全て行なう必要があるのです、そこが大変なところです。



Q 仕事をしていて何か発見したことは？

かつて自治会では図書係を割り当て、その入所者が図書の整理や受け入れをしていました。その仕事ぶりは大変細かく、1冊ずつに蔵書印が丁寧に押され、何月何日誰から寄贈された本なのか記入されていました。蔵書はジャンル別に分類され、通し番号が振られて配架されていました。さらに「図書台帳」というものも作られており、博物館の資料台帳にあたるものがあることに驚くとともに感動しました。



パラパラとめくっていくと、途中まで読んだところに折り目がつけられているものもあれば、しおりの代わりに爪楊枝が挟まれているものもありました。二つ折

りにされたお札が挟まっているのもありました。お札の発行年、使用されていた年代からある程度実際にその本が読まれていた時代を推定し、蔵書印からは自治会の組織の変遷なども読み取ることができ、新たな発見があるたびに嬉しくなりました。かつての療養所生活において、読書は数少ない娯楽の一つだったと思います。表紙がぼろぼろになって何度も修繕されている本からは、多くの人が何回も読んだのだろうと想像できますし、どんな本が人気だったのか調べてみるのも面白いと思います。当時の人気作品ベスト10を展示してみたい、などと創造力をかきたてられました。自治会蔵書のジャンルは多岐に渡り、寄贈されたもの、購入されたものに大別されます。一般書、百科事典、美術全集、日本・世界の古典文学などがあり、これらを通して入所者の皆さんは知識を深め、時には独学で勉強し、文芸活動にも勤しんでいたのだと思います。もちろんハンセン病関係の本もありました。図書を整理しただけでもこれだけの発見があったので、資料からはより多くの奥深い、かつてそれを使用していた方の様子を知ることができるかもしれません。

Q 最後に展示への想いを教えてください

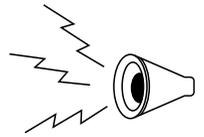
社会交流会館の展示は、入所者の皆さん、職員の皆さん、島外から訪れる全ての人に開かれたものです。誰が見てもわかりやすくハンセン病に関する正しい知識と情報を提供する展示であることを目指します。また展示を見た人が、何か一つでも心に留めて、また来てもっと知りたい、と思ってもらえるようにしたい、という願いがあります。特に、ハンセン病に関する基本的なことすら学ぶ機会がなかった世代にもうまく訴えかけていく工夫が必要だと思うので、そのために努力していきたいです。

グラントオープン後は、大島の美しい自然や島内の史跡めぐりに加え、常設展示があることで、この島がどんな歴史を歩んできたのか、ここで暮らす人々がいかに支え合って生き抜いてこられたか、ということに寄り添い、この史実を後世に伝えていく担い手が増えていくことを願っています。

大島で
会いましょう



瀬戸内放送局 今月の「大島アワー」



園名の「大島青松園」の通り、大島には立派な松がたくさんあります。約800年前、源平合戦で敗れた平氏の亡くなった場所に松を植えたことから「墓標の松」と呼ばれている松があります。大島がそういう場所だったことから、入所者の間でも盆栽ブームが到来。多くの入所者さんが松やさつきなどの盆栽を育てていました。毎月1回園内で放送中の手作りラジオ番組のコーナー。今回は「入所者の方の趣味のコーナー」から、森和男さんの盆栽のお話についてです。

盆栽をはじめたのは、昭和40年代の終わりごろで45年くらいはやっている。最初は見よう見まねではじめた。山へ松を取りに行つて「こうやって掘ってきたら根がつくんや」など教えてもらった。昔は山のとっぺんまで簡単に行けていたので山の頂上からとってきた松が今もある。松とさつきを合わせて30鉢くらいはあった。今は楽しみよりも苦労の方が多い感じです。自分の体の自由がだんだんきかなくなつてきているのと、やはり盆栽は生き物だから手入れが大変。3年に1回植え替える必要がある。鉢から出して、根を切って、土を落として、また鉢に戻して、空いたところに砂を入れてという作業。世話が大変。でも以前は綺麗に盆栽が育つていったんがやっぱり楽しみだった。毎日見ていたら、盆栽が今どんな調子なんかもすぐ分かる。これからは、自分の体力を考え、少しずつ減らしていかないかなあ・・と思っているよ。



へ 大島の連絡帖 へ



大島ジオラマ制作プロジェクト

2018年10月。展示室の一番奥に設置していたジオラマを90度に回転しました。今は、展示室の真ん中にあります。どの場所からも見られるようになり、迫力もさらに増しました。

制作中によく来てくれるのは、自治会の森さんと野村さんです。一緒に見てもらい、建物、道、畑、相愛の道、集水路などの位置や大きさ、それらの場所でどんなことをしていたのかまでいつも丁寧に説明をしてくれます。私たちも懸命に聞き取りをして、ジオラマに反映しています。

松もたくさんの方々の手によって制作が進行中です。これまで県内外の子どもから大人まで延べ約600人が松づくりに参加し、800本もの松が完成。これらの松は、南北の山と平地に植えていきます。

建物は、入所者さんが住んでいた寮、納骨堂、大島会館などが仕上がりました。これから事務本館や治療棟など他の建物も完成を目指して制作中です。社会交流会館はオープンに向けてジオラマもいよいよお披露目のときが迫ってきます。

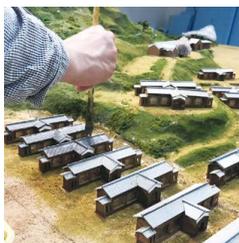


Photo Shintaro Miyawaki



編集後記

毎年この時期になると最初に大島へ行ったときのことを思い出します。私にとつての初めての大島は、瀬戸内国際芸術祭2010が始まる前。あれから9年が経とうとしています。先日、高松市主催のワークショップが大島であり、参加したある高校生が「僕は10年くらい大島に通っているけど、新しい発見がまだたくさんあった。」と言っていました。その言葉に共感したと同時に、日常的に通っていると大島で出会う人や風景が当たり前のような存在になっていることに気付かされます。それが当たり前前にならないよう、毎回出会う入所者さんや職員さんたちとのさまざまな会話や行く度に見られる違う風景を大切にしたいと思った瞬間でした。

大島レター 5 2019年1月31日 発行 高松市
編集協力 国立療養所大島青松園、大島青松園入所者自治会
編集 こえび隊（笹川尚子、甘利彩子、北川フラム）
問い合わせ NPO法人瀬戸内こえびネットワーク 〒760-0019 香川県高松市サンポート1-1
TEL087-813-1741 FAX087-813-1742 info@koebi.jp www.koebi.jp